

フランス人 (59・5・19)

河盛 好藏 (大12文丙)

私が三高に入りましたのは大正九年でございます。丁度、第一次大戦でフランスが戦争に勝ったときで、それまでフランスという国はあまり日本で尊敬されていなかったんですけれども、ドイツに勝ったというので大いに見直された上に、フランスからはクロードルという有名な詩人が大使に来ておりまして、あれやこれやでフランスブームといったものが起りかけていたときであります。そのために私もひとつフランス語をやってみようかという気になったんですが、その頃フランス語を教えてくれる高等学校は、一高と三高しかありません。私は関西生まれですから、三高でフランス語をやることになりました。

また大正九年は学制改革のあった年で、最初の年は従来のように、七月に試験を受けて九月に新学期が始まったのですが、翌年からは新学年が四月から始まることになって、そのために学年が短縮されました。つまり私は一年生のときは二学期しか学校に行っていないわけです。

あの頃の高等学校は語学の学校みたいなもので、一週間に十数時間フランス語の授業があり、一日に同じ先生の顔を二度見ることは珍しくありませんでした。しかし当時の外国語の授業は非常に原始的で、現在でしたら半年位で覚えてしまうようなことを三年間かかってやったような有様でした。つまり非常に能率の悪い勉強の仕方をしたわけでした。その上、わが国のフランス語教育の水準も非常に低く、文法書でも辞書でもろくなものがありませんでした。

さて、こんなふうにしてフランス語の勉強を始めたものの、私たちはまだフランス人というものを見たことがないのです。私が始めて会ったフランス人は三高で教わったオリアンチス先生です。先生は三条河原町のカトリック教会の神父を長く務めていられました。先生は一八五五年に生れ、二十四歳のとき、つまり明治十二年に日本へ来られ、最初は長崎と広島で布教、次で四国の松山で教会を造り、明治四十年ごろ河原町へ来られて主任司祭になり、大正十一年に亡くなりました。私たちは大体明治三十五年生れですから日本滞在期間は先生の方が長いわけです。したがって日本語はなかなかお上手でした。会話を受持つていられましたが、ちょうど折竹錫先生という大変よくお出来になる先生が留学されることになったので、その留守中折竹先生の時間を持たれて文法を担当されました。教科書も折竹先生の作られた日本語で書かれたフランス文典をお使いになるんです。ところがオリアンチス先生は、その教科書をこてんぱんにやっつけるんです。『こういう事はフランスでは言わない。これはおかしい。だいたい日本人のくせにフ

ランス文法を作るなんて、ちょこぎいな』といった調子で、私たちは大笑いしたことを覚えております。

そのオリアンチス先生が大正十一年に亡くなられて、河原町教会でお葬式がありました。そのとき私たちは始めてミサというものを見た訳であります。跡継ぎの神父さんが追悼演説をなさったとき『オリアンチス先生は必ず天国へ行かれることは確かである。しかし、それよりも前に煉獄をお通りになることがあるかも知れない。だから、先生のためにどうか一日も早く天国へ行かれることを皆様でお祈りして欲しい』と言われました。

私たちはオリアンチス先生は死なれたらすぐに天国へ行かれるものだと思いましたが、先生のような徳の高い坊さんでも天国へ行くまでに煉獄を通らなくちゃならないのかと思ってびっくりしたことを覚えております。

その次に私たちの会ったフランス人はバロンさんという航空将校でした。第一次大戦では、フランスの空軍が非常に活躍しましたので、日本もその頃は空軍の建設期でしたので、フランスから航空将校をいろいろ招聘していました。

バロンさんもその一人でした。非常に発音のきれいなフランス人でパリジャンだったのかも知れませんが。授業にも熱心でした。皆さまご存じのフランス文学者の杉捷夫君は僕と同級生ですが、その頃からフランス語がよくできて、杉君の書いた仏作文をバロンさんが非常に誉めたことを覚

えております。詩人の三好達治君は私たちより二年下でしたが、バロンさんが初めて教室へ来たとき、みんなの代表になってフランス語で歓迎の辞を述べたそうであります。あの三好君がフランス語で演説したなんて考えることも出来ませんが、面白い話ですね。ともかく私たちはバロンさんを見たとき、初めて本当のフランス人に会った気がしたことは事実であります。

フランス人だけではありません。あの頃はフランス映画なども輸入されていなかったのですが、パリというのはどういう街であるかという風な事も全く知りませんでした。高等学校二年の時だと覚えていますが、「鉄路の白薔薇」というフランス映画が新京極の映画館で上映されました。これは汽車の機関士と街娘との恋物語で、最後に二人が別れて、恋人の運転する汽車がリヨン駅からマルセイユへ向って出て行くのを陸橋の上から女が見送る場面が出てきます。汽車の白い煙が街娘の顔にひろがってゆくという如何にもその頃の映画らしいシーンなのですが、私はその時初めてパリのリヨン駅を見た訳であります。その印象は強烈で、今でも鮮やかに私の記憶のなかに焼きついていきます。思えば、あの頃から私はフランスに、パリに憧れていた訳であります。

私が始めてフランスへ行きましたのは昭和三年五月。二年半ばかり滞在しておりました。二十歳のときであります。戦後は五月革命のありました一九六八年五月に四十年ぶりで参りまして、それ以後大体二年おきに夏にパリへ出かけますので、通算して二カ年以上フランスに滞在している訳であります。したがってパリは第二の故郷と言つてよいくらい、私にはなじみの深い町にな

っております。六十年前のパリを知っている人間はパリ人のなかでもあまり多くないんで、今では珍しがられております。いつか、エトワールのそばをタクシーで走っておりますとき、一九二九年にフォシユ元帥の国葬をあの広場で見た話をしますと、運転手がびっくりして後ろを向いて、「その時分私はまだ生れていなかった」といって大いに尊敬してくれたことがあります。

前置きが長くなりましたが、今日は近頃のパリとフランス人について思いついたままをお話致したいと思えます。

まず大きな特色としてあげられるのは戦後のパリには非常に移民が多いということであり、現在フランスの人口は五千五百万ぐらい、六千万にはなっておりませんが、その一割が移民だと言われております。つまり国民の一割が外国人なんです。フランスは昔から移民の多い国で、一九〇七年のマルセイユが舞台になっている小説によりますと、当時のマルセイユの人口の五人に一人は移民だったそうです。昔の移民はスペイン人とイタリア人が割合多く、そのうち半分は現在ではフランスに帰化しております。その次に多いのはポーランド人でした。しかし彼らは今度の戦争の後には大部分が祖国へ帰って非常に減っております。

ところが一方で仏領印度支那とかアルジェリアなど以前の植民地の開放された連中が生活難のためにフランスへ移住して来たのです。これら新しい移民は以前からフランスに永住している外人とお互い利害が錯綜して、彼らの統一した意見というものがなかなか纏らない。ドイツでも

イギリスでも移民は少なくないんですが、彼らはお互いに力を合せて市民権を獲得して行きます。しかしフランスではその点が非常に遅れておりまして、彼等にはフランスの市民権がなかなか与えられない。フランスは移民に対する待遇の悪い国で、彼らの権利をできるだけ認めまいとしている。国民も彼らに市民権を与えることに熱心ではない。最近は二十五歳以下の若い人達は移民を自分たちと平等にしなくちやならんと考えているようですけれども、年配のフランス人は相変わらず彼らを一段低い階級の者と考えております。そしてパリなどでは道路や下水の掃除であるとか、ゴミの取片付けとか言った、人のいやがる仕事は全部、黒人やアラブの移民にやらせております。のみならず彼らの賃金は非常に安く、フランスの一般労働者の二分の一以下なのです。その上、住宅事情が非常に悪い。おそらく移民達が現在最も痛切に求めているのは人間の住める住宅を与えてくれということでありましょう。

ところが現在のフランスには移民の労働力にかわるものにベトナムの難民があるのです。例えば日本でも評判のフランス国鉄の新幹線ですね。あの工事には相当移民の労働者を使ったんですけれども、彼らが賃上げ闘争を起すと政府はその度ごとに難民キャンプから労働者を募集してその代りに当てました。難民の方は文句を言うとも直ぐに国外へ追放するぞと脅かされますから、悪い条件でも仕方なしに我慢をするといった有様だったそうであります。

現在のフランスでは失業が大きな問題になっていますが、働く口はいくらでもあるが、嫌な仕

事をしたがらないから失業者が多いのだという人がおります。その嫌な仕事を全部移民の労働者にやらせているので、移民には迷惑すると言いながら国外へ出てもらうことが出来ないのです。しかしフランスで外国人が働くことは次第に難しくなっておりますことは事実であります。

次に誰も言うことですが、最近のパリは治安が非常に悪くなっております。ジブシーの子供が群れをなして若い日本人の女性を取り巻いてハンドバッグを奪って逃げるとか、第一流のホテルでもロビーで物を盗まれることは始終であるとか、メトロのなかでスリにやられない方の方が珍しいとか、そんな話は耳にタコが出来るほど聞かされます。そのほかモンマルトルの周辺には白昼にでも女一人では歩けない場所があるとか、十年前には考えられなかったほど治安が悪くなっておりますが、これも素性の分らない移民がいまのパリにどっさりおることと無関係ではありません。

私は永い間フランス語の教師をしておりますが、確信をもって言えることはフランス人というのは言葉を万能と信じている国民だということであります。彼らは言葉でもって表現出来ないものは絶対ないと信じております。腹芸などというものは彼らには通じません。したがって、言葉で説得しない限り彼らを納得させることは出来ません。日本人はもの事を説明する場合に、よく喩（タトエ）をあげて相手の理解を求めますが、フランス人はどこまでも論理と推理に頼りません。喩で話を進めてゆきますと次第に論旨が不正確になって、こちらの言いたいことがゆがんで

理解される危険があるからです。論証のための訓練は国語教育の重要な題目になっています。ポール・ヴァレリーの文章などは、その種の文章の模範と言ってよいと思います。フランスの政治家で雄弁家の多いのは、言葉の魔力というものを彼らがよく知っているからです。政治家でも演説の下手な者は尊敬されません。議会でも小党分立の故もありますが、議員の演説で投票が左右されます。平常は敵対関係にある政党人の演説であつても、その演説が面白くて成程と納得すれば、反対党にでも賛成投票をします。原稿を朗読するような政治家は、政治家としての根本的な資格を欠くものと考えられています。

このように言葉を大切にし、しゃべることが非常に好きですから、食事の時も黙って食べるなんてことは決してありません。食事の喜びの半分は喋りながら食べることにあります。これは私たちが大いに学びたいところだと思います。

フランス人はまた笑いの感覚の鋭い国民で、人を笑わせることも巧みですが、それ以上に相手のエスプリに敏感に応じる回転の早い頭の持主です。会話の楽しみを知らない人、また相手を会話で楽しませる能力を持たない人は何時までたってもフランス人の生活にとけ込むことが出来ないうでしよう。

ところでフランスと言えば料理ということになりますが、近頃のフランス料理は昔日の權威を失いつつあると言われています。その理由はフランス料理がエリート料理になりすぎて、他の

国の料理にくらべて非常に高価になったからだと言われています。しかし私は高価という点では日本料理が世界で一番高いのではないかと思っています。日本料理の一流店では一食に三万円も四万円も取るのは稀ではありませんが、パリでは第一流のレストランでも料理の上にワインも含めて二万円あれば充分です。しかし安くおいしい点では到底中国料理にはかなわないので、パリでも中国料理店はふえる一方です。この傾向はロンドンでも同じで、フランス料理店五百軒位に対して中国料理店は四千軒近くあると言われております。

パリには天皇陛下が行かれたので有名なトウル・ダルジャンというレストランがありますが、現在の持主のパトリック・テライユさんのお祖父さんがニューヨークのロックフェラー・センターの一番天辺にあるレインボウ・ルームという有名なレストランの眺望の良いに感心して、自分の店を改築したとき、最上階に現在のトウル・ダルジャンを造ったのだと言われています。建物の最上階にレストランを造るといふようなことはパリではそれまでなかったのです。ここはセーヌ河が見下せるのが特色で、それ以来高い所から見下せる、眺めのいいレストランがパリでもほとんど建つようになりました。レストランは単に料理が美味いだけでは駄目で、コンフォタブルな設備がなくてはいけないし、室内装飾にも注意しなくてはいけないと経営者が考えるようになりました。

料理についてもいろいろ新しい工夫をすることが必要になりました。そのための刺激を与えた

のは日本料理であります。現在、パリのホテルやレストランには日本人のコック見習いが相当おりますが、彼らは若くて骨惜しみをしないで働く。その上にフランス人と違って金銭に淡泊です。彼らはパリで金を儲けようなどとは全く考えず、修業して日本へ帰っていいレストランを出したいという希望者が多いのですから、金銭に淡泊です。これはフランス人の気に入ります。そのために日本人の見習はレストランのシェフに非常に可愛がられます。一方彼らは日本人のコックから日本料理についていろいろ教わります。日本料理は懐石料理に見られるように僅かな量の素材で多種多様な料理を作り、その盛りつけが実に芸術的であることを彼らは知ったのです。同時に彼らは日本の調味料、とりわけ醤油のすばらしさを知ったのであります。

私が若い頃パリに居ました時は、醤油を買おうと思ってもそれを売っている店はマドレーヌのそばに一軒あるだけでした。それも中国の物産を売っている店で、日本の醤油だけがソース瓶に入って売っておりました。相当高値でしたが、我々はそれを買って帰って下宿で出る食物の何にでもかけるのです。どんな食物でも醤油をかけると実に味がよくなるので、私たちは非常に重宝致しました。此頃では日本の食糧品はわさびや茗荷のようなもの以外はなんでも手に入り、その専門店もいくつがあります。味の素などはフランス人も珍重するそうです。

この日本の懐石料理を取り入れたのが、いわゆるヌーベルキュイジーヌ（新料理）で、日本でも有名なポール・ボキユーズは熱心なその推進者です。近頃の日本のフランス料理店では、殆ど

の店がヌーベルキユイジーヌを取り入れているのは皆さんご存じの如くであります。しかしそのボキユーズも近頃は大部分がさめて、日本料理とフランス料理との間には根本的な違いがあるので、自分はヌーベルキユイジーヌに全てを賭ける訳には行かないと言出しておるそうであります。

さきほどのトウール・ダルジャンの主人の説に拠りますと、料理にもオペラと同じく、照明とコーラスと背景という三大要素が必要だそうであります。料理場でもなるべくガスなどの火を使ひ、電熱器は使われないそうです。それから彼は美容食は大嫌いで、美容食など料理のうちに入らない、オーケストラの無いオペラみたいなものだと言っております。トウール・ダルジャンは鴨料理で有名ですが、あそこの鴨は北京ダックと青首を交配したものだそうです。こんなふうにはフランスは今でも料理の王国ではありますが次第に昔日の威力を失いつつあることは事実のようであります。それにフランス人自身、とくに大衆は昔のように食べ物について喧しく言わなくなつておるようです。インスタント食品でも喜んで食べております。食べ物に割くお金の額も非常に減つておるようです。フランス人は昔はパンをよく食べた国民でしたが、そのパンを食べる量も近頃は非常に減つてきて、特に女性は男の半分しかパンを消費しない。野菜にしても、フランス人はジャガイモが非常に好きで、またジャガイモの非常においしい国ですが、そのジャガイモも昔ほど食べなくなつています。これはやはりあまり太つてはいけないというためでしょうか。

話は飛びますが、料理と同じくフランス語そのものも昔ほどの威力を持たなくなつています。

以前は「世界語だ」といつて威張っていたのですが、近頃はだんだんフランス語の通じる国が少なくなつて来ております。今から五十年ほど前にはヨーロッパの国々を旅行しますと、いいホテルでは必ずフランス語が通じたものであります。けれどもこの頃は、スペインのマドリッドなんかの第一流のホテルへ行つてもフランス語が判るのは年輩の使用人だけです。若い連中にはもう全くフランス語が通じなくなつています。その代りに英語が以前にまさつてよく通じ、今や立派な世界語になつています。ですからこれからの若い人は何よりもまず英語を勉強することが必要です。フランス語などはその次でいい訳です。フランス語の教師をしていながらこんなことを言うのはおかしい訳ですが、まず英語、それからスペイン語が近頃は勢力を伸ばして来ています。これは南米の国々ではスペイン語を使う人が多いからでありましょう。ドイツ語はと申しますと、やはり昔ほどの威力を持たなくなつていふことと申します。日本も経済的發展を続けてゆくと、そのうちに日本語も英語と同じように世界語になつてくれるかも知れません。そうなれば我々には非常に有難い訳ですね。

話がすっかり散らかつてしまいましたが、最後に申し上げたいことは、フランス人は一般に怠け者だということとあります。私たちのつき合つてゐるフランス人は向こうのインテリが大部分で、彼らはよく働き、よく勉強する優秀なフランス人ですが、一般大衆のフランス人は進取の氣象に乏しく、できるだけ働く時間を減らして、賃金はなるべく沢山貰いたいという我儘勝手で、

自分さえ良ければ良いというのが多いのであります。生活を楽しむことには実に熱心ですが、会社のために自分を犠牲にしようなんて考えている者は一人もないと言ってよいでしょう。一般大衆の知的水準も決して高くありません。私がパリへ行きますといつも御厄介になる日本人の女性がいりますが、彼女はフランスの大きな会社勤めていて、フランス人の若い女の子の部下も沢山おります。それを時々家へ呼んで御飯を食べさせてやることがあり、そんな時には私も同席することがあるんですが、彼女達の教養とか知的能力は非常に低いですね。わが国のいわゆるミーちゃんハーちゃんのほうがずっと高級な気がします。尤もこれは私の買被りかも知れませんが。彼女たちは新聞もろくに読まないのではないかと思います。しかし生活を楽しまたいという欲望は実に旺盛で、その方面の知恵は相当なものであります。結局、あくせく働くことはイヤだが、お金はどっさり貰いたい、休日はできるだけ多く取りたいということになるのであります。

一般にフランス人は昔から一日も早く勤めをやめてあとは年金の利息で呑気に暮そうというのが理想でしたが、近頃はフランスでも寿命が長くなるし、物価がインフレでどんどん上がりますから年金で食べて行くのは非常に難しくなっております。そのためにいつまでも働かなくてはならない。それにフランス人は貯蓄思想が旺盛ですから、できるだけお金を貯めるために夫婦共稼ぎをする人が非常にふえております。若い人で夫婦共稼ぎをしない人は少ないのではないでしようか。細君にも収入があるというのは結構なことですが、経済的に自立が出来るために、離婚す

る細君が増えて来るといふ傾向になる。現在のフランスはアメリカと並んで離婚国だと言われている。役所に出す身分証明の届には必ず離婚歴を書き込むことになっております。それほど離婚する人が多いのですね。ですから最初から離婚を見越して、子供が生れるまで正式には結婚しないで同棲するだけの夫婦というのが非常に多いそうであります。

私は若い時からフランス文学を研究しております、フランスは大好きな国で、大いに好意を持って居るのですが、その将来にはあまり望みを持って居ないのであります。尤もフランスは非常に蓄積が多い上に土地が肥沃で、耕地面積が非常に多い。われわれの国と違って自給自足が十分出来るという国ですから食物には決して困らない。気候もそんなに悪くはない。まあ実に恵まれた国ですから二世紀や三世紀では決して滅びるようなことはない。その点、日本の方が心配な訳ですが、昔ほどの勢いが失くなっているのは争われなれないと思ひます。われわれのような勤勉な国民から見ますと、もう少しフランス人は働かなくちゃいけない。もつと勤勉にならなければいけないと思われます。フランスという国は管理職の非常に忙しい国で、彼らみな有能で、秀才で、一人で働いているようなものです。日本人で、向こうで会社を経営していて、フランス人の社員を使っている人は「彼らは実に働かない。それでいて休暇と賃上げばかり要求する」と皆一様にこぼしております。このままではジリ貧になるばかりですが、フランス人がどういふ風にして血路を開いて行くかといふことは私のようにフランスとフランス人に絶えず関心を持っている人間

にとっては非常に重要なことであります。

甚だ取りとめのない話ばかりで申し訳ありませんが、この辺で終らせて頂きます。

(共立女子大学特任教授)